

平成 27 年度教職大学院派遣研修報告書

| | | | |
|---------------|--|-----|-------------|
| 派遣者番号 | 27K11 | 氏名 | 野口 由博 |
| 研究主題 —副主題— | 児童のアクティブ・ラーニングを深め課題設定する力を育む方法 —体育科学習を通して— | | |
| 所属校 | 港区立青南小学校 | 派遣先 | 東京学芸大学教職大学院 |

| 項目 | 内容 |
|----------|--|
| I 研究の目的 | <p>「アクティブ・ラーニング」について、中央教育審議会(2012)『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』では、「伝統的な教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義された。歴史的にとらえても、小・中学校は高等教育よりも早く、一般に普及している。そのことで授業の成立が難しいという課題をもつ学校も多くある。そのために、学習者の能動的学習を引き出すような工夫は以前より行われてきていると考えることができる。実際に調査したところ、学習者が「主体的に」または「自ら」、「能動的に」学ぶ姿を研究主題として研究している学校が 25 パーセント以上あった。また、教員はアクティブ・ラーニングという言葉の説明できなくても能動的な学習を意識していることが明らかになった。しかし、小・中学校の現状について、前述の答申が出された背景を基にして考えると、児童の学習環境が大きく改善されているとは言えない。</p> <p>文部科学省(2014)『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』では「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。」と小・中学校を含む初等中等教育に対しても、変化を求めた。その際に大切にしたい考え方が二点ある。第一は M・チクセントミハイのフロー理論である。1996 年の有名な図から、より方向性が示されている。スキルが足りていないのに、高い学習課題に向かってしまい、不安を感じている学習者や、学習課題が低すぎて退屈に感じている学習者を想像することは難しくない。児童一人一人のスキルと学習課題のバランスがとれていることが重要であることが分かった。第二は田村学のアクティブ・ラーニングに必要な探求のプロセスである。①子供が自分で課題を見つける、②必要な情報を収集する、③集めた情報を整理・分析する、④気付いたことや考えたことをまとめて発表・表現したり、考えたことを行動に移したりする、となっている。研究者による研究の中で、アクティブ・ラーニングか否かは、「学習プロセスへの関与」と「学習内容の外化」であると言われている。その両方が入っている、分かりやすいプロセスになっている。本研究では課題設定する力を育むために、フロー体験につながりやすいとされている活動をもつ実技教科の中から、体育科を中心に研究を進めるとともに、前述の「フロー理論」と「探求のプロセス」に事前調査を加えて手だてを構成することにした。</p> <p>体育科の目的は時代背景に影響を受ける形で「身体教育」、「スポーツによる教育」、「スポーツの教育」と変わって来た。学習指導論は戦中の軍事色の強い「集団的（一斉または班別学習）画一的な指導」から、昭和期は教員主導の「A型」に対して、異質グループによる問題解決学習である「B型学習」、高度経済成長期の運動技術を中心とした運動学習である「系統学習」・身体活動をレクリエーションとして活用する「生活体育」、小グループで系統的な学習をさせることをねらう「グループ学習」、運動文化を系統的に教え、方法的にグループ学習を使う「めあて学習」という変遷とおさえることができる。互いに部分的な批判の上に成り立っているものの、より良い学習指導を目指すという意味で知識の蓄積として現在の体育科指導・学習に影響を与えているとすることができる。以上のことから、本研究の目的を「学習者が課題設定する力を高めるための手だてについて提言すること」とする。</p> |
| II 研究の方法 | <p>学習者が課題設定する力を高めるための手だてについて提言するにあたり、先行研究を調べてみると、小・中学校の実践研究の報告数が少ないことが分かった。そのため本研究では、実践のモデルを構築し、その有効性を検証することにした。流れはまず、事前調査は質問紙調査・個別面接調査・課題設定についてのイメージマップ作成を行い、結果も踏まえて実践を構成した。実践は都内公立小学校第 5・6 学年各 1 学級で実施した。事後調査は個別面接調査・課題設定についてのイメージマップ作成を行い、授業の様子や学習カードの記述の変容と合わせて、本研究の検証を行うことにした。</p> |

| | |
|----------------|--|
| <p>Ⅲ 研究の結果</p> | <p>事前調査から、分かったことがいくつかあるが、その中から一つ紹介する。「体育授業は面白い」と「課題設定するために最も必要なこと」については、小学校では1%水準で有意差が見られた。残差分析から、「体育授業は面白い」と感じている児童は、自分の実力を把握することが必要であると考えている反面、感じていない児童は基本的な知識を知ることが大切であるとする傾向があることが分かった。このことから、小学校では、基本的な知識が十分伝わるように留意する必要があることが明らかになった。</p> <p>前述の事前調査や、「フロー理論」、「探求のプロセス」より、単元の1時間目に①単元の理解、毎時間②基本的な知識の習得、③理想像形成、④現状把握、⑤課題設定の時間を設定した。また、課題設定から課題解決の流れがうまくいっているかを確認・修正させるため、他者評価→自己評価→教師からの助言を⑥リフレクションとして設定し、本研究では①から⑥を「U-Rセット」として単元を構成した。④の現状把握の場面では、他の学習者の運動中に側面で観察する役割を置く他、2人～3人に1台のタブレットPCを用いて互いに撮影し、見合う時間を設けた。また、運動や動画を見合う際には、自由に会話をした方がよいことを繰り返し指導した。</p> <p>検証の第一は事前事後に行った、「課題設定をするために必要なことのイメージマップ」のカテゴリー数の変容についてである。学習者が記入した内容を、KJ法を用いて内容毎に解釈し、事前・事後で分類整理したものを、体育科教育の研究経験年数10年程度の教員に協力を得て、研究者のトライアンギュレーションを行い、修正を加えた。第5学年の変容として明らかになったことは、主に三つある。そのうちの一つを紹介することにする。それは課題設定そのものへのプロセスが増加したことである。具体的には、「タブレットで映像を見ること」や「理想像と現状を比較する」などの記入が見られた。これは課題設定のために活用可能な道具と、それを使うスキルが身に付いたことが要因と考えられる。</p> <p>第6学年の変容として明らかになったことは、主に二つある。そのうちの一つを紹介する。それは総数にはほとんど影響がないものの、理想像形成と、現状把握、課題設定が大きく伸びたこと。単元を通して課題設定の「U-Rセット」を行うことで、他領域についての課題設定場面でも、どこに重点を置いて課題設定を行うかが明確になったと考えることができる。前述の通り課題設定に必要な情報を絞ることができていると言える。</p> <p>検証の第二については学習カードの内容の変容である。小学校第5学年マット運動の実践では、単元を通して課題設定ができている児童が18名、単元開始時にはうまくできなかつたが、できるようになった児童が5名、単元を通してできていたが、しだいに抽象化して行った児童が4名という結果になった。例えば、側方倒立回転に挑戦する児童が、教員が用意した映像や友達の姿を理想像としてもった上で、現状から脚が伸びていなかったことを目の前の問題とし、マットにテープを貼って、真っ直ぐ行けるようにして、脚を伸ばすように意識するという方法を考えた。小学校第6学年陸上運動の実践では、単元を通して課題設定ができている児童が17名、単元開始時にはうまくできなかつたが、できるようになった児童が6名、単元を通してできていたが、しだいに抽象化して行った児童が1名という結果になった。例えば、高跳びに挑戦する児童が、教員が用意した映像を理想像とした上で、自分の課題を明確にし、タブレットを見返し、友達からアドバイスをもらうという方法を考えていた。</p> |
| <p>Ⅳ 考察</p> | <p>前述の各調査の変容より、「U-Rセット」の中で課題設定する力が高まることが明らかになった。本研究の課題については「U-Rセット」を用いても、課題設定をうまく行うことができなかつた学習者が3名いた。要因として、理想像形成の段階と現状把握の段階で、映像や友達の動作を見る視点が定まっていなかつたことが考えられる。成功か失敗かと言うことだけにとどまらず、動きを分析できる視点を身に付けさせたい。また、できていない点を頑張ると言うことだけでなく、そのためにどんなことを意識して運動を行うのか考えさせたい。</p> <p>研究の活用法については、三つの視点で本研究を見ることが大切である。第一は、習得・活用・探求という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうかである。第二は、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうかである。第三は、子供たちが見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びの過程が実現できているかどうかである。以上の三つの視点に立ち、指導者自らが指導方法を不断に見直し、改善していくという前提の上で、本研究は児童のアクティブ・ラーニングを深め課題設定する力を育む実践として成立する。</p> |

